

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 「カラ」「デ」「ニ」の標識を持つ統語構造および理解

氏 名 穆 欣

論 文 内 容 の 要 旨

日本語では、文中にある構成素 (constituent) の後ろに標識 (marker) をつける。たとえば、ある名詞句の後にガ格をつけることで、文の主語を表すことができる。しかし、同じ標識のつく構成素が常に同じ文法機能 (grammatical function) と深層格 (thematic role) を持つわけではない。たとえば、「コーヒーが飲みたい」においては、通常は主格を示すガ格名詞句は主語ではなく、目的語についている。また、「太郎がボールを蹴った」と「太郎が不思議に思った」における2つの「太郎が」は、格標識が同様ではあるが、深層格がそれぞれ動作主と経験者である。このように、日本語では、文面上にあらわれる標識 (本研究では表層格と呼ぶ) と文法機能の間では、さらに、表層格、深層格、文法機能の間では一対一の関係ではなく、多様な対応関係がみられる。

主語の表層格に限って言えば、主格 (nominative case、本研究ではガ格と呼ぶ) だけでなく、与格 (dative case、本研究ではニ格と呼ぶ) によって示される場合がある。さらに、奪格 (ablative case、本研究ではカラ格と呼ぶ) や具格 (instrumental case、本研究ではデ格と呼ぶ) も一定の条件を満たせば、主語を示すことが可能であることが、記述的な研究において指摘されている (角田, 1991など)。これまで、これらの主語を示すことのできる標識の中で、ニ格 (主語) が多様な視点から検討されてきている。日本語学では、ニ格主語文の成立条件、ニ格主語の主語性 (たとえば、柴谷, 1978)、生成日本語学では、ニ格主語の格付与 (Ura, 1995など)、心理言語学で

は、ニ格主語文の処理メカニズム (Tamaoka et.al., 2005など) の研究がある。しかし、これらの3つの視点からのカラ格主語とデ格主語に関する研究は進んでいない。

生成日本語学においては、ガ格および主語を示すニ格は格助詞として、カラ格とデ格は後置詞として位置付けられており、格助詞主語 (ガ格主語・ニ格主語) と後置詞主語 (カラ格主語・デ格主語) は、それぞれに異なる位置に生成され、その結果として異なる統語構造を有する。本研究では、動詞句内主語仮説に基づいて、ガ格主語文の統語構造とカラ格・デ格主語文の統語構造を想定し、日本語母語話者および中国語を母語とする日本語学習者のカラ格主語文とデ格主語文の理解 (または処理) のメカニズムを心理言語学の文処理実験で考察した。さらに、中国語を母語とする日本語学習者の場合、どのような文法知識がカラ格・デ格・ニ格主語文の理解に貢献するののかも検討した。

本研究は4章から構成されている。第1章では、主語という用語をめぐる論争、日本語における文法関係レベル、表層格レベル、深層格レベルにおける多様な対応関係を検討した。さらに、プロトタイプ的な主語の特徴をまとめ、その特徴に照らしながら、カラ格主語およびデ格主語の主語性を考察した。これらの検討を通して、主語という用語が必要であり、なお、カラ格名詞句とデ格名詞句を主語として認めるという本研究の立場を示した。

多くの先行研究や参考資料では、ガ格主語文と異なり、カラ主語文とデ格主語文の成立に条件が課されると指摘している (たとえば、張, 1995; 井上, 2002; 日本語記述文法研究会, 2002)。そのため、カラ格主語とデ格主語の使用頻度が低いと予想される。第2章では、カラ格主語文とデ格主語文の使用実態を明らかにするために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言』 (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese, 略称 BCCWJ) を使って、「主語+動詞」というパターンで検索した。検索結果を用法別で分類し、主語 (主体) の用法の頻度、割合を算出した。その結果、4,887件のカラ格の実例が見つかり、その中に、主語 (主体) を表すカラ格が12件あった。同パターンで検索し、9,228件のデ格の実例が見つかり、その中に、主語 (主体) を表すデ格が731件あった。このことから、主語 (主体) としてのカラ格の頻度が低く、あまり主語を示さない。一方、主語 (主体) としてのデ格の頻度が典型的な使い方に比べて低いが、ある程度使われることがわかった。頻度によって、カラ格主語文とデ格主語文の反応時間がガ格主語文より長く、正答率もガ格主語文より低いことが予想される。また、異なるコーパス間

の分布を直接比較できるように、カラ格とデ格全体のエントロピーと冗長さの指標を算出した。エントロピーと冗長さという2つ指標から見れば、カラ格は用法がデ格より少なく、一定的な用法が繰り返して使用されるという傾向がある。一方、デ格は用法が多い上に、カラ格よりも多様な用法で使用される傾向がある。このことから、中国語を母語とする日本語学習者の場合、デ格主語文のほうがカラ格主語文よりも理解が難しいと予想される。実際、文処理実験の結果は、この2つの予想を裏付けた。

第3章では、実際に日本語母語話者と中国語を母語とする日本語学習者がどのようにカラ格主語文とデ格主語文を理解するのかを検討するために、生成日本語学を理論背景にし、主語仮説（動詞の項としての解釈）と付加詞仮説（後置詞自身の解釈）という2つの仮説を立た。先行研究におけるカラ格主語文とデ格主語文の成立条件にしたがって、カラ格とデ格主語二項動詞能動文の刺激を作り、反応時間パラダイム（reaction time paradigm）に基づいて、文正誤判断課題で文処理実験を行った。結果を線形混合効果モデリング（linear mixed-effects modeling, LME）で分析した。その結果、日本語母語話者の場合、ガ格主語文の正順とかき混ぜ語順の間でスクランブル効果がみられた。しかし、カラ格主語文の正順とかき混ぜ語順の間にはスクランブル効果はみられなかった。さらに、IP副詞を含めたカラ格二項動詞能動文の場合でも、予想されたスクランブル効果がみられなかった。この結果から、日本語母語話者は、カラ格名詞句を主語というより付加詞として理解していると考えた。つまり、カラ格名詞句は、vPの指定部に生成されるのではなく、付加位置に生成されるという結論である。このことから、カラ格主語の主語性が低いことがわかった。

一方、デ格主語文では、ガ格主語文と同様に、正順語順とかき混ぜ語順の間でスクランブル効果がみられた。デ格主語文のスクランブル効果は、ガ格主語文より小さかった。これは、デ格主語がvPの指定部にあり、かき混ぜ語順の場合、目的語がvPの付加位置に移動するため、IP内に出ることがないことに起因すると考えられる。そこで、かき混ぜ語順のデ格主語文の統語構造は、かき混ぜ語順のガ格主語文より単純であると考えられる。日本語母語話者は、デ格名詞句を主語として処理していると思われる。このことから、デ格主語の主語性が強いと言えよう。

中国語を母語とする日本語学習者の場合、カラ格主語とデ格主語の難易度などを考慮し、カラ格主語文とデ格主語文の理解が難しいという仮説および正順語順を想定できないために語順

の違いによるスクランブル効果があらわれないという仮説を立てた。日本語母語話者に課したのと同じ刺激語を使った文処理実験の結果、仮説1について、カラ格主語文とデ格主語文の平均正答率がそれぞれ80%と70%以上であり、玉岡（2005）でのニ格主語文の平均正答率より高い結果が得られた。日本語教育においては、カラ格とデ格が主語を示すことができることに言及しないことが多いが、日本語能力試験1級またはN1に合格した上級日本語学習者であれば、カラ格とデ格主語文をある程度理解できることがわかった。また、実験の正答率は、カラ格主語文<デ格主語文<ニ格主語文という順に、理解が進んでいることを示唆した。しかし、文法テストの非ガ格主語文の平均を一元配置分散分析で比べた結果、非ガ格主語文の間には有意な違いがなく、非ガ格主語文とガ格主語文の間には違いがみられた。やはり、もっとも理解しやすいのは、ガ格主語文であることがわかる。

仮説2について、異なる語順のカラ格主語文とデ格主語文では、ガ格主語と同様にスクランブル効果が観察された。このことは、中国語を母語とする日本語学習者は、「～カラ～ヲ～動詞」と「～デ～ヲ～動詞」が正順語順であると想定しながら、文を処理したことを示唆している。日本語教育では、初級の段階から日本語はSOV語順であることを教えている。そのため、本研究の文処理実験に参加した中国語を母語とする日本語学習者もSOV語順が正順語順であることを強く意識すると考えられる。その場合、日本語の目的語は動詞の前に来てヲ格で示されるのが普通である。そのため、かき混ぜ語順では、ヲ格の目的語が文頭に来るので、それをみた時点で、すでに正順語順ではないとことに気づくことになる。次に、カラ格主語とデ格主語を読んで、最後に動詞をみて、目的語のもとの位置が動詞の前であるということがわかる。このようなメカニズムは、文処理の負荷を大きくし、結果的にスクランブル効果が顕著に観察されることになる。

さらに、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、どのような文法知識が非ガ格主語文の理解を促進するのかを明らかにするために、合計84問からなる四者択一形式のテストを行った。テストの得点は、構造方程式モデリング（Structure Equation Model, SEM）の統計手法を用いて解析した。その結果、助詞、連用結合、述部表現が有意に非ガ格主語文の理解を促進し、敬語は有意に理解を促進しないことがわかった。これは、テストの参加者の敬語の習熟度が低い上に、主語と動詞の間の一致に気づいていないことを示唆している。

第4章では、博論の全体をまとめた。そして、今後の課題として、5つの点を挙げた。第1に、さらに大規模なコーパス（たとえば、『毎日新聞』の10年以上とか）を使い、「主語＋目的語＋動詞」のパターンで検査し、カラ格主語とデ格主語の実例がどのような出現パターンを示すかを検討することである。第2に、文を構成する句ごとの詳細に処理メカニズムを考察することである。本研究で使った文理解に要する反応時間は、刺激文がコンピュータの画面上に提示されてから参加者がその正誤判断をして、ボタンを押すまでの時間である。今後、文の構成素である句ごとの初回注視継続時間（first fixation duration）、総注視時間（total fixation time）、注視頻度（frequency of fixation）、逆行頻度（frequency of regression）を実測して、ガ格主語文を基準として、カラ格主語文とデ格主語文の処理メカニズムを再検討する必要がある。そのためには、ガ格主語の正順とかき混ぜ語順、カラ格主語文の正順とかき混ぜ語順、デ格主語文の正順とかき混ぜ語順におけるガ格主語、カラ格主語、デ格主語の注視時間（fixation duration）や逆行頻度を比較する比較しなくてはならない。第3に、尊敬語を取るカラ格主語文とデ格主語文を検討しなければならない。多くの研究の中で指摘しているように（たとえば、柴谷，1978）、主語であれば、尊敬語を誘発することが可能である。たとえば、カラ格主語の場合、「校長から証明書をお渡しになった」のように、動詞の尊敬語を誘発することができる。さらに、Miyagawa（2010）は、敬語の場合は、日本語でも主語と動詞の間に一致があることを指摘している。そのため、敬語形を取る動詞のカラ格・デ格主語文の場合に、スクランブル効果があらわれるかどうかを考察する必要がある。第4に、コーパス検索の結果を分類する際に、深層格は動作主であるかどうか、ガ格主語との交代が許されるのかを基準としているため、「自分で」「みんなで」「親子で」「地域で」などのような先行研究では指摘されていないデ格を主語として分類した。これらのデ格はそれぞれ「状態」（または「条件）」「範囲」として捉えることができる。そこで、今後、これらのデ格名詞句の主語性を考察することを通して、より緻密にデ格主語を分類し、その階層性を明らかにすることを目指す。第5に、本研究では、中国語を母語とする日本語学習者のみを対象に文処理実験および文法・非ガ格主語の習得テストを行った。今後、他の異なる言語を母語とする日本語学習者を対象に、文処理実験と多様なテストを行うことで、母語の違いによる文理解への影響を考察する必要がある。

